

COLLEGE OF
TOURISM
RIKKYO
UNIVERSITY

立教大学
観光学部

2019



立教大学
観光学部



<http://www.rikkyo.ac.jp/tourism>

急増する外国人観光客との共生を模索する

韓 志昊 観光学科 教授

Han Jiho

最近、日本のスキー場や温泉地を訪れる外国人観光客に関する話題をよく耳にします。私が研究のフィールドにしている長野県野沢温泉村は、オーストラリアからのスキー客が「長期の夏休み」を過ごす人気のデスティネーションとなつています。またここ数年は、オーストラリア以外にも観光客が増加しています。

当初はプライベートでスキーを楽しんでいたのですが、ゲレンデや温泉で外国人スキー客が急速に増えていることに興味を持ち、ゼミのテーマとして調査を始めました。すると、パウダースノーに惹かれて日本のスキー場を訪れているなか、特に野沢温泉村にリピーターとして訪れている外国人は、伝統的な町並みや海外では珍しい温泉を楽しむことにも魅力を感じていることが分かりました。

一方で、外国人スキー客が増加したことにより、外国人による観光ビジネスや移住する外国人も予想外に急増

し、これまで見られなかった課題が地域社会に発生しています。現在、私のゼミに所属する学生たちと一緒に野沢温泉村でフィールドワークを行い（右上の写真は現地を訪れたゼミ生たちです）、野沢温泉村における観光の現状を継続して分析しています。

インバウンドに関する研究を進めることで、外国人観光客や外国人住民と地域住民が、観光地において共生する可能性を模索するとともに、インバウンド誘致に取り組んでいる日本各地の観光地に対して、有益なヒントを示すことができると考えています。

ゼミのほかに、私は観光学科で「観光特論（英語）」という講義を担当しています。この授業では、観光に関する専門用語や基礎概念を英語で学習しつつ、観光について英語で書かれた新聞記事や論文を読み進めていきます。それにより、観光を分析し研究するためのツールとしての英語の必要性と活用方法について学びます。

野沢温泉
Nozawaonsen

地域

社会

×

イン

バ

ウ

ン

ド

巻頭企画

立教大学観光学部は、観光学科と交流文化学科によって構成されています。ここでは、ふたつの学科の教員による取り組みに着目し、その特色を紹介します。

右ページの写真はどこで撮影されたか分かりますか？上の写真には、漢字が目立つ派手な看板と、その下を歩く東洋系の顔立ちをした人やアメリカ系の少年が写っています。下の写真には、モダンなデザインの建物に色鮮やかな店構え、手入れされた街路樹の間にところ狭しと停められたバイクが見えます。

実は上の写真はフランスのバリ、下の写真はベトナムのホーチミンで、現地調査の最中に私が撮影したものです（よく見ると上の写真にはフランス語、下の写真にはベトナム語が写り込んでいます）。バリには、特にベトナム戦争の終結を契機にそれまで現地で暮らしていた華僑が多く移り住み、他方ベトナムは、19世紀からフランスの統治下に置かれ、なかでもホーチミンは「東洋のバリ」と呼ばれるほどのフランス化しました。

このように都市は、歴史的な出来事を背景に移動した人びとによって、微づけられてきましたが、近年では、

観光客という存在も都市の性格に影響を与えています。私の関心は、観光の進展によって生活空間に観光が浸透していく過程や、そこから見える都市の特徴を、景観や地図を手がかりに明らかにしていくことにあります。

交流文化学科では、「観光地理学」と「外国地誌（ヨーロッパ）」の講義を担当しています。なかでも「外国地誌」ではバリを中心に取り上げ、現地で撮影した景観写真と精密な都市地図を活用しながら、一般的なイメージとは異なるバリの日常や人びとの暮らしについて学んでいきます。

こうした取り組みの基礎となっているのが、地理学で「巡検」と呼ばれるフィールドワークと地図を組み合わせた地域調査の方法です。写真で示したような何気ない街角の風景も、現地を歩きまわる「虫の眼」と地図が持つ「鳥の眼」の両方を駆使することで、その土地の成り立ちや特色が強く投影された場所として、私たちに迫ってきます。

現地調査と地図を手がかりに 観光空間と向き合う

松村 公明 交流文化学科 教授
Matsumura Koumei

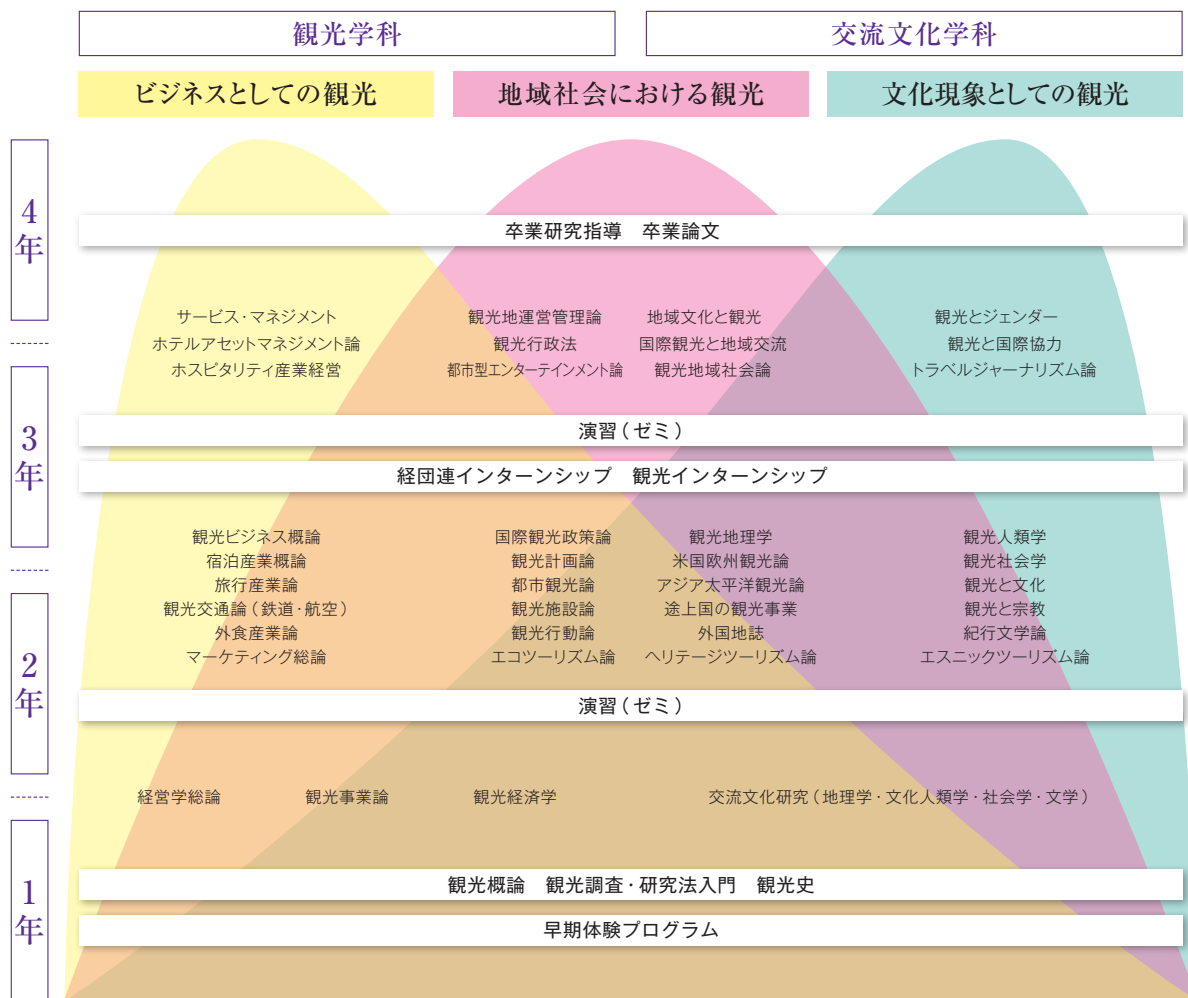


観光学部

College of Tourism



観光学部



※掲載科目は一部です。観光学部の全開講科目については、「立教大学 シラバス・時間割検索システム」<https://sy.rikkyo.ac.jp/timetable/> をご覧ください。
なお、「早期体験プログラム」(1年次)、「演習」(2・3年次)、「経団連インターンシップ」(3年次)、「観光インターンシップ」(3年次)の履修には選考が伴います。

立教大学で 「観光学を学ぶ」 ということ

3つの視点

立教大学観光学部では、大きく分けて3つの視点から観光について学びます。

第一に「ビジネスとしての観光」という視点です。例えば、連日報道されているように、日本には多くの外国人観光客が訪れています。彼らは飛行機やクルーズ船で来日し、ホテルや旅館、ゲストハウスなどを活用しながら滞在し、新幹線や貸切バスだけでなくローカル線やレンタカーを駆使して移動し、買いたいものをしたり日本文化を体験したりします。このプロセスには実に多くのビジネスが含まれます。

第二に「地域社会における観光」という視点です。どのようにしたらより多くの観光客が観光地を訪れるようになるのでしょうか。観光地にどのような施設や設備があると観光客は楽しさや居心地のよさを感じるのでしょうか。あるいは、観光客が多く訪れることで、観光地の社会や文化にはどのような影響があるのでしょうか。地域社

2つの学科

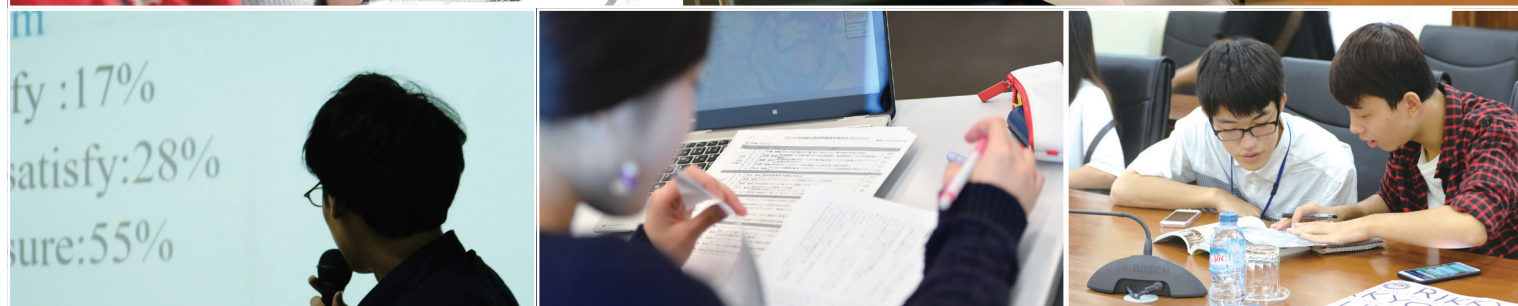
観光学部は観光学科と交流文化学科の2学科から構成されています。

先に示した3つの視点のうち、主に「ビジネスとしての観光」について学ぶのが観光学科で、主に「文化現象としての観光」について学ぶのが交流文化学科です。「地域社会における観光」については、観光学科と交流文化学科の両方で学ぶことができますが、観光学科は「地域づくり」に、交流文化学科は「地域のありよう」にそれぞれ力を置いていくのが特徴です。

なお、観光学科の学生は交流文化学科の科目を、交流文化学科の学生は観光学科の科目を、自らの関心に沿って履修することが可能です。

会と観光は実は深い関係にあります。

第三に「文化現象としての観光」という視点です。そもそも人びとが生活の場を離れて観光に出かけるという行為は、どのような価値観に支えられているのでしょうか。また、世界中の人びとが世界中を訪れることで、何か新しいものの見方や考え方、行動様式が生み出されてはいないでしょうか。観光の現場をよく観察してみると、複数の文化が遭遇と接触を繰り返していることに気づきます。



観光学部



橋本 俊哉 観光学部長
Hashimoto Toshiya

観光は現代社会を映し出す鏡

私たちは、人やモノ、情報がグローバルに行き交うことが当たり前の社会に暮らしています。人が移動すると経済効果が生まれ地域振興に繋がるだけではなく、旅行者と受け入れ側の人びとの交流は新たな文化を生む源泉となります。旅行者にとっても、生活圏を離れた地を訪れることで知的好奇心が刺激され、自らの生活文化の良さに改めて気づくことも少なくありません。

もはや私たちにとって欠かせない存在と言える観光の形態は、時代によって大きく変化

してきました。現代の日本でいえば、見る観光から体験する観光へとウエイトが移行する中で伝統文化に改めて目が向けられ、エコツーリズムやヘルスツーリズムが目されるようになり、都市型の新しい形態の観光が誕生したりしています。観光は、まさに「現代社会を映し出す鏡」なのです。

観光学は、このようなすぐれて現代的な社会現象である観光の影響や効果の解明、新たな観光形態が誕生した背景や現状の分析などをおして、現代社会やこれからの社会のあり

方、さらには人間そのものについての理解を深めようとする学問です。

日本の4年制大学でもっとも長い観光教育の歴史を持つ立教大学は、常に日本の観光教育をリードしてきました。卒業生は、国内のみならず世界各地で活躍しています。こうした伝統とネットワークに支えられた観光学部では、旅行ビジネスの枠組みを超えて、観光をとおして魅力的な社会を創る、さらには人びとの生活を豊かにするために何ができるかを追求し、理論と実践を両輪として、新しい社会を創り上げる挑戦をします。その主役は皆さんです。ぜひ一緒に、伝統ある立教大学観光学部で学び、日本を、そして世界を変えていきましょう。

観光学部での4年間



観光学部のあゆみ

1946年	立教大学に「ホテル講座」が開設される
1966年	社会学部産業関係学科に「ホテル・観光コース」が開設される
1967年	ホテル・観光コースが「観光学科」として独立し、日本初の4年制観光教育・研究機関となる
1998年	観光学科が「観光学部」として独立し、日本初の観光学部となる
2003年	ハワイ大学マノア校（アメリカ）と協定締結
2006年	観光学部「交流文化学科」が開設され、観光学科と交流文化学科の2学科体制となる
	ベトナム国家大学ハノイ・社会科学・人文科学大学（ベトナム）と協定締結
	中山大学（中国）と協定締結
	ラオス国立大学（ラオス）と協定締結
2007年	北京外国語大学（中国）と協定締結
2008年	マサチューセッツ大学（マレーシア）と協定締結
	漢陽大学（韓国）と協定締結
2009年	韓国外国語大学（韓国）と協定締結
2010年	タマサート大学（タイ）と協定締結
	モンゴル国立大学（モンゴル）と協定締結
2012年	チェンマイ大学（タイ）と協定締結
	インドネシア大学（インドネシア）と協定締結
2014年	チュロンコン大学（タイ）と協定締結
2017年	セントラルフロリダ大学（アメリカ）と協定締結
2018年	観光学部創立20周年

1 年次

観光学を学ぶ楽しさを知る

First year



小野寺 達大 観光学科 2016年度入学
Onodera Tatsuki

身のまわりの物事から観光を 考えるようになりました

高校生の頃から旅行が好きで、自分でチケットを手配して国内旅行に出かけていました。こうした経験を重ねていくうちに観光と関係する仕事に興味を持ち始め、学習面でのニーズと合致していた立教大学観光学部への進学を決めました。

1年次に参加できる「早期体験プログラム」は、観光学を学び始めた段階で、実際に海外の現場へ出かけて勉強できるという点でとても魅力的でした。このプログラムでパラオを訪れましたが、美しい景観にもとづく観光地づくりが行われているだけでなく、戦争体験を伝える手段として観光が活用されていることを知りました。また、現地の人びととの交流も印象に残っています。

観光学部で観光学を専門的に学ぶようになってからは、身のまわりにあるちょっとした風景や名物などの日常的な物事に対しても、観光との繋がりを考えるようになるなど、勉強に対して積極的に取り組むようになりました。

天木 柚里 観光学科 2016年度入学
Amaki Yuri

高校での課題が観光学部への 進学に繋がりました

高校1年生の時に、自分が行きたい国のツアープランを考えて発表するという課題が地理の授業であったのですが、この課題に取り組んでいくうちに、自分の学びたい学問が観光学であることに気づきました。これが立教大学観光学部に進学した大きなきっかけです。

もともと外国の文化にも興味があり、大学入学後は何らかの海外研修に参加したいと考えていました。そうしたなか、国外の事例を見ながら、観光の実状や観光化に伴って発生する課題について学ぶ「早期体験プログラム」の存在を知り、観光学部ならではの貴重な学習機会になると考え、参加を決めました。

早期体験プログラムは事前学習が充実しており、訪問先であるカンボジアのアンコール遺跡群の修復状況などについて学びました。そこでカンボジアの遺跡修復に日本が深く関わっていることを知り、現地ではこうした点にも注意しながらフィールドワークを行うことができました。



観光学部での学びは、観光学という学問の「楽しさ」や「奥深さ」を知ることから始まります。そのため、1年次の春学期(RIKKYO Learning Styleの「導入期」に相当)には「観光概論」と「観光調査・研究法入門」を、秋学期(RIKKYO Learning Styleの「形成期」に相当)には「観光史」をそれぞれ必修科目として開講しています。また、観光学科の学生は「観光事業論」、「観光経済学」、「経営学総論」などを、交流文化学科の学生は「交流文化論」、「交流文化研究(地理学)」、「同(文化人類学)」、「同(社会学)」、「同(文学)」などを、選択科目として学び、観光学の基礎を固めます。

観光学部での1年目は、これら基礎科目を通じ、これから始まる観光学の学びをより有意義かつ効果的にするための「土台づくり」を行う期間だと言えます。また、意欲的な学生は、海外でのフィールドワークをとおして観光現象の「リアルな現場」を直接体験する「早期体験プログラム」に参加することができます。

なお、立教大学では学部を問わず、「全学共通科目」と「アカデミックアドバイザー制度」を設けています。「全学共通科目」は総合系科目と言語系科目から構成されており、RIKKYO Learning Styleにもとづいて4年間で段階的な学習を行うことが可能です。

学びの特徴



「早期体験プログラム」では、主に海外で1週間程度のフィールドワークを行うことにより、観光現象の現場を直接体験するとともに、観光をとおしてさまざまな文化やグローバル化する国際社会の実状について学びます。このプログラムには複数のコースが設定されており(コースは毎年度異なります)、全コースとも観光学部の教員が事前学習、現地引率、事後指導を担当します。このプログラムでは、現場体験と少

人数教育をとおして、観光を学問的に捉えるとはどういうことなのか理解し、今日における観光の役割を考えるための基礎的な視点を身につけます。

なお「早期体験プログラム」は1年次のみ受講可能で、人数制限があり、プログラム参加費が必要です。

2017年度 コース一覧 (コーステーマ)

- ・フランス(文学的記憶と町のイメージ)
- ・ポーランド(光を見る観光/闇を見る観光)
- ・パラオ(パラオにおける観光の特徴と歴史資源の位置づけ)
- ・カンボジア(世界遺産アンコール遺跡群の観光化)
- ・ホーチミン(市場をめぐる生活空間と都市観光)
- ・ハノイ(ハノイの観光の現状と課題:旧市街地の魅力発掘)
- ・タイ(タマサート大の学生と学ぶ観光都市バンコクの多面性)
- ・台湾(植民地期建築の保存と活用:アート施設への再生を中心に)
- ・韓国(学生交流、住民参加による地域の観光活動について学ぶ)

2017年度 講演会一覧 (肩書は講演会開催当時)

- ・「日本と海外のホスピタリティ産業を学ぶ:留学を経て挑むもの」根来 葉子(KPG HOTEL&RESORTS Kafuu Resort Hotel Fuchaku CONDO・HOTEL 人事部)
- ・「キャリアデザインの考え方」山田 稔(一般社団法人 国際人育成支援協会 理事)
- ・「The Brand Image of Hawaii as a Tourist Destination」Dr. Russell Uyeno (Department of Urban and Regional Planning/University of Hawaii at Manoa)
- ・「パリ:都市の記憶」石井 洋二郎(東京大学理事・副学長、同名誉教授)
- ・「離島における地域づくり・人づくり:長崎県対馬市の取り組み」前田 剛(対馬市しまづくり推進部主任)



「アカデミックアドバイザー制度」は、すべての立教大學生にアカデミックアドバイザーを割り当て、大学における学習全般に関する助言、指導、情報提供などを行うものです。観光学部では、1年次「観光調査・研究法入門」のクラス担当教員のほか、2・3年次「演習」の担当教員がアカデミックアドバイザーとなっており、学生への対応を行います。

また、1年次における学びの効果を高めるため、実際に観光の現場で働いている方々や、海外の大学から観光学者たちを招いて、年に複数回「アカデミックアドバイザー講演会」を開催しています。

観光学部では、講演会のほかにも学生とアカデミックアドバイザーが交流する機会を設けており、1年次の学生がスムーズに大学生活になじめるよう、サポートしています。

アカデミックアドバイザー制度



2 年次

Second year

観光学をひろく理解する

滝尾 亮太 観光学科 2015 年度入学
Takio Ryota

ゼミと部活動を両立させながら 日本一を目指します

将来は、世界を相手にした仕事に就きたいと考えています。そのため、「売れる仕組み」について学ぶことができます。ゼミを選びました。ゼミでは、近年の「ヒット商品番付」を題材に、その商品がヒットした理由や背景などについて仲間たちとディスカッションを重ねています。ある意味答えのない問いですが、自分たちなりの答えを導き出すことで、マーケティングにおける洞察力も同時に養われていると実感しています。

2 年次の夏には、ゼミのメンバーと参加したツアー企画コンテストで最優秀賞を獲得し、商品化が決まりました。チェコの知られていない魅力を掘り起こすことで、これまでにないツアーを提案することができたのですが、メンバー全員連日徹夜で作業に没頭しました。

現在は、体育会アメリカンフットボール部に所属し、日本一を目指して練習しています。ゼミでの勉強と部活動を両立させ、充実したキャンパスライフを送っています。



太田 奈緒 交流文化学科 2015 年度入学
Ota Nao

インタビューをとおして 人と人の繋がりに迫ります

「文化」と名のつくものに漠然とした興味があり、1 年次から文化に関連する講義を多く受けてきました。すると徐々に、人と人の繋がりのなかで生まれ根づいていったものや、それを促していった環境に関心が絞られていきました。そこで、文化人類学や民俗学の手法から生活史に迫るゼミで学ぶことを決めました。

ゼミでは、生活史の基礎知識や調査手法を学習した上で、身近な年長者にインタビューを行ったり、大田区の町工場で働く方々へ聞き取り調査を行ったりしています。文化人類学や民俗学を深く学べるだけでなく、そこから派生する別の学問分野の視点や考え方について、ゼミの仲間と自由にディスカッションができるのもゼミの魅力です。

ゼミ活動を重ねていくなかで、人に寄り添った立場で物事を理解することの大切さに、改めて気づきました。将来は観光に限らず、そういった「人との交流」に携わることができる職に就けたらいいな、と考えています。



観光学部での 2 年目 (RIKKYO Learning Style の「形成期」に相当) は、観光学を持つ「ひろがり」について学びます。1 年次で身につけた観光学の基礎知識を背景に、観光と関わる事象を幅広い視点から学んでいきます。ここでの学びをとおして「観光」とひとことで言っても、その考察対象と分析視角が多様多様であることに気づくはずですよ。

観光学科では、主に「観光ビジネス」と「地域づくり」というふたつの柱から科目が構成されています。「観光ビジネス」に関しては、「宿泊産業概論」「旅行産業論」「外食産業論」「観光交通論(鉄道・航空)」「マーケティング総論」などを、「地域づくり」に関しては、「観光計画論」「観光施設論」「都市観光論」「観光行動論」「国際観光政策論」などを開講しています。

交流文化学科では、主に「文化」と「地域」というふたつの柱から科目が構成されています。「文化」に関しては、「観光と文化」「観光と宗教」「観光人類学」「観光社会学」「紀行文学論」などを、「地域」に関しては、「観光地理学」「外国地誌」「米国欧州観光論」「アジア太平洋観光論」「途上国の観光事業」などを開講しています。そのほか、常に変化する現代観光の最先端を取り上げる講義として、「エコツーリズム論」「エスニックツーリズム論」「ヘリテージツーリズム論」「観光ビジネス概論」「観光の社会的広がり」「市民参加とまちづくり」なども開講しています。

学びの特徴



演習(ゼミ)

観光学部では、2 年次から「演習」がスタートします。演習は「ゼミ」とも呼ばれ、各教員が学生との対話を重視し、専門的な視点から授業を行っています。ゼミのテーマや進め方は教員ごとに異なっており、教員の専門性と独自性が大きく発揮される密度の濃い学習の場となっています。また、多くのゼミで、学生同士がディスカッションを行ったり、学生と教員と一緒に国内外でフィールドワークや調査を行ったりするなど、学生が教員の話を聞く普段の講義とは一線を画します。

学生と教員による双方方向の濃密なコミュニケーションを前提としたゼミは、学生と教員の距離が近く、学習を深めようと思えば学生の意欲次第でどこまでも学びを追究できるのが大きな特徴です(ただし、ゼミ履修には選考があります)。2 年次ゼミでの初歩的な学びから 3 年次ゼミでの発展的な学習へ、といったように、ゼミの内容は学年ごとに深化していきます。そして意欲的な学生は、観光学部における学びの締めくくりとして、4 年次 (RIKKYO Learning Style の「完成期」に相当) に卒業論文の執筆に取り組みます。



3 年次

Third year

観光学を深く掘り下げる

矢野 優芽 観光学科 2014 年度入学生
Yano Yume

観光の現場で地域づくりの 難しさを実感しました

2 年次の講義で、「人」と「暮らし」を観光資源とする地域づくりの先進事例として長崎県小値賀町が紹介され、印象に残っていました。3 年次の「観光インターンシップ」で、その小値賀町がインターンシップ先のひとつであることを知り、これは行くしかない、と参加を決意しました。

長崎県の離島である小値賀町では、夏祭りの運営、宿泊施設や観光推進団体の業務を補助したほか、町民の方々へのインタビューやホームステイ、漁業体験など、さまざまな体験をすることができました。小値賀町でのインターンシップをとおして、キャンパスでは学ぶことのできない地域の実状や地域活性化の難しさを現場で知るとともに、「観光はあくまでも地域づくりの手段であって、目的ではない」ことを強く実感しました。

地域活性化の手段と同じように、地域との関わり方も多様だと思います。将来は観光に限らず、幅広い視野から地域に貢献できるようになりたいと考えています。



逆瀬川 尚典 交流文化学科 2014 年度入学生
Sakasegawa Hisanori

インターンシップで 緊迫した現場を経験しました

「経団連インターンシップ」に参加し、ANA 総合研究所を通じて実習を行いました。インターンシップでは、旅行会社への営業に同行したり、羽田空港内のオフィスや研修施設を訪問したりしたほか、旅行商品造成部で新商品の企画やプレゼンテーションを体験することができました。

航空業に限らず、観光関連産業では激しい価格競争が行われていますが、そうしたなかで各社とも新たな付加価値を生み出そうと試行錯誤しています。インターンシップでは、このような緊迫した現場に身を置くことができ、貴重な経験となりました。また、インターンシップ中にさまざまな立場の方と話すことができたのも、大きな財産です。

「経団連インターンシップ」以降は、できるだけ多くのインターンシップに参加することを心がけ、どのような働き方が自分にマッチしているのかを模索しています。



自分の関心に合わせて観光学を深く掘り下げていくのが、観光学部における 3 年目 (RIKKYO Learning Style の「完成期」に相当) の取り組みです。2 年次に学んだ多種多様な観光学のひろがりのなかでも、自分が興味・関心を持った分野についての学びを深めていきます。

観光学科では、「サービス・マネジメント」「ホスピタリティ産業経営」、「ホテルアセットマネジメント論」、「観光地運営管理論」、「都市型エンターテインメント論」、「観光行政法」といったより専門性の高い科目を開講しており、観光学科の柱である「観光ビジネス」と「地域づくり」に関する学びを一層深化させることが可能です。

交流文化学科では、「地域文化と観光」、「観光とジェンダー」、「トラベルジャーナリズム論」、「観光地域社会論」、「観光と国際協力」、「国際観光と地域交流」といったより専門性の高い科目を開講しており、交流文化学科の柱である「文化」と「地域」に関する学びを一層深化させることが可能です。

また、3 年次においては、2 年次から始まったゼミがあり専門特化していくだけでなく、授業の一環として「インターンシップ」に参加することが可能になります（ただし、選考があります）。観光学部では、学部の特性をいかした「観光インターンシップ」と「経団連インターンシップ」を並行して開講しています。ともに実習を行うだけでなく、事前学習や成果報告会などを効果的に組み合わせることで、将来を見据えた質の高い学習機会となっています。



学びの特徴

観光インターンシップ

「観光インターンシップ」は、旅行・宿泊・交通といった観光ビジネスに関わる企業（下記「観光ビジネス系」）と、観光振興や地域づくりに取り組む全国各地の自治体・観光協会・NPO など（下記「地域づくり系」）を実習先としています。学生は、それぞれの受け入れ先で実践的に学ぶことを通じ、観光を支えている現場の力や魅力を肌で感じることができます。

春学期は各実習先の事前研究とマナー研修を行い、夏季休暇中に数週間かけて実習を行います。秋学期は、実習についての振り返りを行って報告書を作成し、その成果を報告会で発表します。

このインターンシップでは、観光学部での学びと現場での体験学習が効果的にリンクすることを目指しています。これにより、今までの学びがより一層深まるだけでなく、自らのキャリア形成に向けて学ぶべき新たな課題に、学生が自主的に取り組む強い動機づけとなります。

2017 年度 観光インターンシップ実習先

【観光ビジネス系】エス・ティー・ワールドグループ/JAL グループ/富士屋ホテル/日本ホテル(株) ホテルメトロポリタン/ザ・リッツ・カールトン東京/エアタビチ ヌイ 日本支社/(株) プリンセスホテル/(株) デイリー・インフォメーション
【地域づくり系】特定非営利活動法人みたか都市観光協会/一般社団法人中野区観光協会/阿寒湖温泉・鶴雅グループ/長崎県対馬市/山口県長門市/北海道東川町/特定非営利活動法人国際りんご・シードル振興会/一般社団法人信州いいやま観光局



経団連インターンシップ

「経団連インターンシップ」は、観光事業の重要性と人材育成の必要性に鑑み、一般社団法人日本経済団体連合会と観光学部が連携して行っているもので、実習先は観光と関わる事業を展開している企業が中心となっています。

春学期は事前研修を行い、受け入れ先から派遣された講師の方々から各事業の歴史や現状などを学んだ上で、希望の実習先を決定します。それぞれの受け入れ先での実習を終えた秋学期には、報告会での発表やレポート作成を行うことにより、インターンシップでの成果をまとめるとともに、そこで得られた知識や経験の定着を図ります。

このインターンシップへの参加学生は、観光やビジネスの最前線である実習先で貴重な体験をするだけでなく、社会人として求められる基礎的な知識や実践的な知見、卒業後も活用できるビジネスマナーやプレゼンテーションテクニックなどを幅広く学ぶことができます。

2017 年度 経団連インターンシップ実習先

(株) アサヒビールコミュニケーションズ/味の素(株)/(株) ANA 総合研究所/近畿日本ツーリスト(株)/東京モノレール(株)/日本ホテル(株)/(株) びゅうトラベルサービス/三井不動産商業マネジメント(株)/三菱UFJニコス(株)/森トラスト・ホテルズ&リゾーツ(株)/ヤマト運輸(株)/リゾートトラスト(株)



4 年次

観光学部での学びをまとめる

Fourth year



小川 豪 観光学科 2013 年度入学
Ogawa Tsuyoshi

震災復興プロジェクトとゼミに 打ち込みました

観光学部での4年間で、主にふたつの活動に力を注ぎました。まずは福島県北塩原村における震災復興プロジェクトです。このプロジェクトは、東日本大震災による風評被害の克服を目指すもので、「地域の宝」を掘り起こすとともに、こうした資源を活用してエコツアーを企画・実施したほか、散策マップづくりなどを行いました。現場での実践にもとづくプロジェクト活動を通じて、エコツーリズムによる地域づくりに強い興味を抱くようになりました。

震災復興プロジェクトとともに精力的に取り組んだのが、ゼミでの学習です。生まれ育った多摩地域の歴史にもともと関心がありましたが、観光学部で学んでいくうちに、観光の歴史研究に興味を持つようになりました。そこで、卒業論文「名所図会と旅日記にみる江戸市民の行楽地としての多摩」では、ゼミの総決算として、江戸時代に編纂された地誌「江戸名所図会」や旅日記「江戸近郊道しるべ」を手がかりに、江戸期の多摩で展開された行楽の特徴や江戸市民から見た多摩の魅力を明らかにしました。

卒業執筆は苦勞の連続でしたが、ゼミの仲間とともに悩み、励まし合いました。無事に卒業論文を書き上げることができたのも、こうした仲間がいたからだ実感しています。

奥原 彩加 交流文化学科 2012 年度入学
Okuhara Ayaka

1 年次からの海外フィールド体験が 卒業論文に結実しました

卒業論文では、日本人の海外移住と観光産業の関係を着目し、カンボジアのシェムリアップで聞き取り調査を行いました。現地では、観光産業に携わる日本人に焦点を当て、彼らがなぜそこへ移住し、観光とどのように関わることで生きていこうとしているのかについて考察しました。

このテーマへたどり着くまでには、ふたつのターニングポイントがあります。ひとつめが1年次に参加した「早期体験プログラム」です。このプログラムに参加してミャンマーを訪れたのですが、そこでは、常識や先入観といったフィルターをとおしてではなく、実際にフィールドで得た見聞から物事を理解することの大切さを学びました。

ふたつめのポイントがゼミ合宿です。3年次のゼミ合宿でシェムリアップを訪問し、日本人移住者の方々に会いました。フィールドワークを行いながら、理想の人生を追い求める彼らに「生きる場」を与えている観光の存在って何なのだろう、という疑問を抱き、それが卒業論文「理想の人生をめぐる移住」を執筆するきっかけとなりました。

また、3年次と4年次の間には、学部間協定を利用してタイのタマサート大学へ留学しました。観光学部で学ぶことで、私の可能性は大きくふくらみました。



活躍する卒業生

小清水 奈穂さん
Koshimizu Naho

株式会社森ビルホスピタリティコーポレーション
グランド ハイアット 東京 人材開発部 勤務

海外の学生との交流に刺激を受けました

ホテルの採用担当として、採用計画から入社まで一連の業務を担当しています。採用に関わったスタッフがホテルで活躍している姿を見ると、非常にやりがいを感じます。

学生時代で印象に残っていることは、ゼミで訪れた海外での経験です。ゼミではブルネイを始め数カ国を訪問しましたが、それぞれの国で現地の学生と交流する機会がありました。そこで同世代の若者がどのような考え方をしているのか知り、大変刺激を受けました。

勤務先のホテルには、世界各国からお客様がいらつしゃいます。観光学部でさまざまな国の文化を体験できたことで、多様な価値観を受け入れる素地が育まれ、いまの仕事に繋がっていると考えています。



櫛部 裕児さん
Kushibe Yuji

丸紅株式会社
海外電力プロジェクト第二部 勤務

観光学の視点をビジネスに応用しています

現在は海外発電所の投資事業に従事しています。現地の政府関係者、メーカー、銀行などとの交渉したり、グローバルに構成されたプロジェクトを運営したりと、海外出張が多い部署です。

サークル、ゼミ、留学などすべてに全力を注いだキャンパスライフでしたが、一番の思い出は卒業論文の執筆です。ゼミの仲間と切磋琢磨し、自分で設定した問いに対する答えを出すべく、図書館に通いながら書き上げました。

観光学部ではホテル投資について積極的に勉強しましたが、いまの仕事は投資対象が発電所に変わっただけで、学生時代の学びと共通する部分も多いと感じています。観光学部で培った新しい視点が、ビジネスの現場でいかされていると強く実感しています。



三嶋 千晶さん
Mishima Chiaki

柏市役所
地域づくり推進部 地域支援課 勤務

大学での学びが地域づくりに繋がっています

地域コミュニティにおける課題解決のお手伝いや、コミュニティ施設の管理・運営などをおして、市民主体の地域づくりを推進しています。市民の皆様と意見を交わし、悩みながら解決策を模索しています。

学生時代に所属していたゼミでは、フィールドワークを行うだけでなく、レポート完成までの作業手順を自分で考え、必要な行動を選択する姿勢を身につけることができましたが、これは社会人にとって大変重要なスキルだと考えています。

さまざまな学問分野からのアプローチや、現地まで足を運び、見て、聞いて、考えるフィールドワークを重視する観光学部での学びは、物事を多面的に理解する視点を養うだけでなく、新しい気づきと成長をもたらしてくれました。



留学

Overseas Study

学部間協定（派遣・受入）

観光学部は、海外の大学15校と独自に国際交流協定を締結しています。これらの大学は、いずれも各国を代表する名門校で、学部間協定にもとづく留学生の派遣と受け入れを相互に実施しています。

「学部間協定（派遣）」では、留学先の大学で語学や専門分野に関する講義を英語で受けることができます。立教大学のなかでも観光学部生の上に提供されている留学プログラムで、期間は半年もしくは1年、留学先での学費は免除されます（一部例外があります）。

「学部間協定（受入）」により、観光学部は各国から多数の留学生を受け入れています。そのため、キャンパスでは国際交流が盛んで、留学生のための多彩なプログラムが展開されています。

言語と文化現地研修

観光学部の2年次以上を対象とした短期研修プログラムで、観光学部の国際交流協定校に約2週間滞在します。現地の学生と交流しながら、その国の言語、文化、歴史だけでなく観光の現状についても学び、日本とは異なるキャンパスライフを体験します。また、協定校から学生が来日した際は、プログラム参加者がパティとして活躍します。

2017年度実施コース

タイ語コース：タマサート大学（タイ）
インドネシア語コース：インドネシア大学（インドネシア）
ベトナム語コース：ベトナム国家大学ハノイ・社会科学人文科学大学（ベトナム）
中国語コース：中山大学（中国）

学部間協定（派遣）

多民族国家で戸惑いながら
学びを深めました

大高 江里奈
Otaka Erina

観光学科 2013年度入学
マラヤ大学（マレーシア）へ留学

ゼミで宗教建築について学んでいたのですが、イスラムのことをよく知らないことに気がつき、まわりの友人が欧米の大学を選択するなか、マレーシアへ留学することを決めました。多民族国家であるマレーシアでは、街中で聞こえる言語もさまざまですし、宗教や文化もそれぞれ異なります。

留学先のマラヤ大学では、マレー語や中国語といった語学系の講義のほか、実技系の科目も受講しました。マレー語に慣れないうちはマレーシア人の友だちに通訳してもらったり、周囲に助けられながら楽しく大学生生活を送ることができました。イスラム文化のなかで生活してみて、戸惑うことも興味深いこともありましたが、留学後は以前よりタフで積極的になったと自覚しています。

タイ語が通じたときの
嬉しさと達成感

田村 貴翔
Tamura Takato

観光学科 2015年度入学
タマサート大学（タイ）へ留学

1年次に参加した海外プログラムでマレーシアを訪れ、東南アジアのことをもっと理解したいと思い、2年次で言語と文化現地研修に参加しました。滞在していたタイのタマサート大学では、タイ語やタイの文化・歴史に関する講義だけでなく、タイの伝統的な楽器を演奏するクラスにも参加し、タイ人の前で演奏する機会に恵まれました。

タイ語に関しては発音の難しさが印象に残っていますが、授業で習った表現を使って食堂で注文ができたときは、嬉しさとともに達成感を覚えました。この研修で得たことは、文化に対する考え方には多様性があったり当然だということです。帰国後は、こうした視点を意識しながら、授業に臨むことができます。

言語と文化現地研修

観光学部での経験をいかして
活躍したい

朱 皓英
Zhu Haoying

北京外国語大学（中国）より観光学科へ留学

日本に留学してみて、環境が美しく人が親切だということを実感しています。立教大学のキャンパスは特に自然が豊かで、四季折々の景色を楽しめます。日本語をスキルアップするために日本に来ましたが、旅行をするのが好きなので、観光学科で勉強をしています。将来は、日本と関係する仕事に就きたいと考えています。企業への就職を念頭に置いていますが、通訳や研究者にも魅力を感じています。いずれにしても、観光学部での経験や日本語をいかして活躍したいです。

短期研修では満足できず
1年間留学しました

今井 りえ
Imai Rie

観光学科 2012年度入学
西江大学（韓国）へ留学

1年次と2年次に立教大学の短期語学研修で韓国へ行きましたが、それだけでは満足できず、大学間協定を利用して1年間韓国へ留学しました。留学先の西江大学は、小規模ですが勉強熱心な学生が多いことで知られており、勉学に集中することができました。

欧米からの留学生が多いため英語で行われる授業もあり、国籍の異なる学生たちとディスカッションができたのは貴重な経験です。留学を経て、さまざまなバックグラウンドを持った人たちと交流することが、純粹に楽しいと感じられるようになりました。

学部間協定（受入）

学部間協定校

アメリカ：ハワイ大学／セントラルフロリダ大学
タイ：タマサート大学／チェンマイ大学／チュラロンコーン大学
ベトナム：ベトナム国家大学ハノイ・社会科学人文科学大学
ラオス：ラオス国立大学
マレーシア：マラヤ大学／マレーシア科学大学（予定）
モンゴル：モンゴル国立大学
インドネシア：インドネシア大学
中国：中山大学／北京外国語大学
韓国：漢陽大学／韓国外国語大学

大学間協定

大学間協定

立教大学は、海外の大学87校と国際交流協定を締結しています（2017年10月現在）。これら大学間協定校への留学は、立教大学の全学部生に提供されており、期間は半年もしくは1年、留学先での学費は免除されます（一部例外があります）。

海外体験

Overseas Experience



遠藤 雄太郎

Endo Yutaro

交流文化学科 2014 年度入学

自分の価値観をひっくり返されたい

世界を一周するため、2 年次に一年間休学しました。アルバイトで旅の資金を貯め、インド行きの航空券だけ買って日本を出発したんです。インドから先は行きたいところへ行きたい手段で行くというスタンスで、飛行機、鉄道、バス、ヒッチハイクを駆使して最後はチリから日本に戻りました。

なかでも一番長く滞在したアルメニアが強く印象に残っています。すべてが楽しかったけれど、すべてが辛かった。言葉が通じない、文化の背景が分らない、人ともっと仲よくなりたいのに、とどこかしさでいっぱいでした。アルメニアで試行錯誤しているときにオランダ人の知り合いから英文ガイドブックの原稿を頼まれたのですが、これは旅の大きな成果になりました。

帰国後はつまらないと思うことがなくなりましたね。例えば天井の電球を見ても、ああこれはあそここの工場でこういう人たちがつくっているんだよなあ、って想像できるようになりました。いまは人類学や地理学系の科目だけでなく、トラベルライティングや航空産業に関する



永井 沙知

Nagai Sachi

交流文化学科 2014 年度入学

知らないことが多いことに気がつきました

3 年生のときに半年間、国際交流基金「日本語パートナーズ」の一員としてインドネシアのメダンに滞在し、現地の高校で日本語教育のサポートや日本語クラブの運営に携わりました。滞在中は先生のサポートだけでなく、放課後に生徒と一緒にお寿司をつくったり、浴衣を着たり、書道をしたりと日本文化を楽しみながら体験できるようなプログラムを考案して実践しました。

高校生のときから海外に興味があったので観光学部へ進学しました。観光学部で講義やゼミに参加するうちに東南アジアの開発途上地域への関心が徐々に強くなってきて、2 年生のときに日本語教育サポートに関わる NGO のプログラムでカンボジアへ行ったのが大き

な転機になりました。インドネシアから帰ってきてからは、インドネシア語の勉強に力を入れています。また、海外での経験を踏まえると観光学部の授業がより深く理解できることに気がつきました。大学で学ぶことへの意識が高まり、観光学部以外で開講されている授業にも出席するようになったのも帰国後の大きな変化でしようか。

将来は、さまざまなバックグラウンドを持つ人たちと出会い、交流できるような仕事に就きたいと考えています。留学して外国語をきちんと習得してみたいという気持ちもあるので、将来については観光学部で勉強しながらじっくり考えてみます。まだまだ知らないことが多いですから。



観光学科

Department of
Tourism and Hospitality Management



観光学科 | Department of
Tourism and Hospitality Management



立教大学における観光教育の歴史は、70年以上に渡ります。当初はホテルに関する講座から始まり、観光の発展と課題の多様化に伴って、教育・研究の領域をひろげ、現在に至っています。

今日、「観光立国」という方針が掲げられ、これからの日本を支える重要な柱のひとつに観光が位置づけられるなど、観光への期待はこれまでに増して高まっています。多くの企業が観光を有望なビジネスチャンスとして注目しているだけでなく、地方創生に向けて観光を積極的に活用しようとする取り組みが各地域で活発に行われています。

観光学科は、こうした社会的要請のもと、主に観光ビジネスや地域づくりという観点から、現代社会における観光の役割とあり方を追究します。観光を理解するための学問的視点だけでなく、これまで培ってきたネットワークをいかし、ビジネスや地域の現場からもたらされる最新の知見にもとづき、観光をめぐる状況をリアルに捉えています。

講義の特色

観光学科の講義は、主に「観光ビジネス」と「地域づくり」というふたつの柱から構成されています。

「旅行産業論」、「観光交通論（鉄道・航空）」、「ホテルアセットマネジメント論」、「旅行情報システム」、「外食産業論」、「サービス・マネジメント」、「コンベンション産業論」、「ホスピタリティ産業経営」、「都市型エンターテインメント論」など観光をビジネスの視点から取り上げた科目群や、「観光計画論」、「観光政策・行政論」、「都市観光論」、「地域経済学」、「地域開発論」、「環境・景観論」など観光を地域づくりの視点から取り上げた科目群を開講しています。このように観光学科の科目構成は、今日において拡大する観光ビジネスや地域づくりのあり方を反映したものとなっています。また、観光の現場で活躍している方々による講義を受講する機会がある点も、観光学科の特色です。

ゼミの特色

観光学科のゼミの多くが、観光の現場に着目した実践的な学びを重視しています。それぞれのゼミで、マーケティング、経営学、経済学、工学、心理学、景観論といった学問分野の視点から、観光とビジネス、観光と地域づくりの関係や観光の果たす役割について専門的な分析を行っています。実際に、学習の成果を観光の現場にフィードバックしているゼミもあります。

観光ビジネスの最先端にアプローチします

林 洋一郎 観光学科 2015年度入学
Hayashi Yoichiro

幼い頃にテーマパークを訪れたときの思い出が忘れられず、大学では、多くの人がびとを惹きつける場所や空間について勉強したいと考えていました。テーマパークに関する本を読み、特にその経営手法に興味を抱いたのが観光学を知ったきっかけです。

進学先を検討しているときに立教大学観光学部が存在を知り、観光ビジネスや観光地づくりについて学びたいと考え、観光学科を志望しました。経営学、経済学、心理学、地理学など、多彩な学問分野から観光にアプローチできることや、観光の現場で活躍されている方々から直接話をうかがえる機会が多いことに魅力を感じました。

実際に観光学科で学んでみて、観光を深く理解するためにはさまざまな学問の視点や知識が必要だということを感じています。多彩な学問分野の見方や考え方を身につけることで、いままでも気づかなかった観光の側面に意識が向くようになりました。また、教室での学びだけでなく、観光の現場を知ること大切だと実感しています。観光の最前線で活躍されている方々の経験から学んだり、観光地で実際にフィールドワークを行ったりすることで、これまでの学習内容がよりリアルになるだけでなく、課題を発見することができます。

現在所属している韓ゼミでは、グループワークを中心に、国内の観光地を事例に取り上げ、観光地や観光産業の実態を調査・分析するための手法を学んでいます。ゼミでは毎回課題や発表が課せられますが、主体的に学ぼうとする雰囲気があるため、やりがいを強く感じています。

このように観光学科では、日々変化する観光の最先端を学ぶことができます。

2018年度の主な担当科目〔演習（ゼミ）のテーマ〕	
東 徹 教授 Azuma Toru	マーケティング総論／サービス・マネジメント／演習 〔観光・サービス・地域振興のマーケティング〕
麻生 憲一 教授 Asoh Ken-ichi	観光経済学／地域経済学／演習 〔地域を媒体として観光現象を考える〕
梅川 智也 特任教授 Umekawa Tomoya	観光政策・行政論／観光地運営管理論
小野 良平 教授 Ono Ryohei	環境・景観論／風土と観光／演習 〔風景や環境の観点から観光を考える〕
毛谷村 英治 教授 Keyamura Eiji	観光施設論／施設・空間造形論／演習 〔施設や空間の正しい見方や捉え方を学ぶ〕
庄司 貴行 教授 Shoji Takayuki	演習 〔観光経営学：観光をビジネスとして国際比較〕
平 浩一郎 客員教授 Taira Koichiro	宿泊産業概論／ホテルアセットマネジメント論
杜 国慶 教授 Du Guoging	都市観光論／演習 〔地理学の視点から都市観光を考える〕
西川 亮 助教 Nishikawa Ryo	観光学への誘い
野澤 肇 特任教授 Nozawa Hajime	旅行産業論／旅行業経営実務
野田 健太郎 教授 Noda Kentaro	企業情報分析／IT ビジネス論／演習 〔観光産業について分析を行い、今後の動向を予測する〕
橋本 俊哉 教授 Hashimoto Toshiya	観光行動論／観光感性論／演習 〔観光場面における人間の行動や心理について学ぶ〕
羽生 冬佳 教授 Hanyu Fuyuka	※2018年度研究休暇
韓 志昊 教授 Han Jiho	観光特論（英語）／演習 〔観光とホスピタリティ：SMEsを中心に〕
ピーター・E・フックス 特任教授 Peter Erik Fuchs	観光ビジネス計画論／Investment and Finance ※2019年3月退職予定



ホテルやカフェの心地よさや
美術館建築の芸術性とは
毛谷村 英治 教授

ホテルやカフェ、美術館、移動遊園地や繁華街といった場所を事例に、心地よさ、くつろぎ感、楽しさ、趣きをキーワードとして空間構成やデザイン手法について分析しています。また、そこを訪れる人びとの営みによってつくり出される空間文化についても着目します。こうした視点から空間に接近することで、わざわざ遠くへ出かけることなく、自分の生活圏で観光を行うことが可能な現代社会の特徴が見えてきます。

ゼミでは、空間の簡単な計測法やスケッチの描き方を学んだ上で、国内外の美術館や教会建築を訪れます。これらの空間に身を置いて感じたことを言葉にし、ディスカッションを通じてその感覚を整理しまとめる技術を磨きます。こうした活動を繰り返すことで、解答が与えられていない課題を解決していくことの楽しさに、学生たちは気づいていくようです。



観光の現場で課題を発見し
よりよい地域づくりを
羽生 冬佳 教授

ある地域が観光地化していく過程や観光地化が地域社会に与える影響、観光資源の管理および活用方法について研究をしています。観光地における観光客の行動は、休憩や飲食の満足度、滞在空間の快適性や好奇心の充足など、さまざまな要素の蓄積を背景に成り立ちます。こうした行動を予測しデザインすることは、観光地づくりと深く関わります。

観光の現場を実際に訪れ、そこで課題を発見し、有効な解決方法を提案することがゼミ活動の中心となります。ゼミで得られた成果については、できるだけ現地の関係者の前で発表し、フィードバックするよう心がけています。学生には、自分の考えを述べるだけでなく、他人の意見を取り入れてひとつにまとめることや、答えが与えられるのを待つのではなく、自分たちで探究し構築していくことが大事だと、常に伝えています。



観光産業の新しい
ビジネスモデルを分析する
野田 健太郎 教授

銀行での勤務経験をいかし、産業や企業の分析、特に財務会計やリスクマネジメントについての研究を行っています。観光産業といえば、宿泊、運輸、旅行といった産業がすぐ思い浮かびますが、近年はITや金融、製造などに関わる企業が観光的側面を活用した商品を多く開発しており、観光の持つ存在感と重要性は各業界で拡大しつつあります。

担当するゼミでは、さまざまな観光産業を取り上げ、業界動向や企業情報を分析するとともに、新しいビジネスモデルの強みについても検討します。また、経営戦略や財務会計といった、産業や企業を分析する際の基礎知識の習得にも力を入れています。これらを踏まえることで、観光に関するプロジェクト提案の実現可能性が格段に高まるからです。学生にはいつも「なぜそうなのか」を問いかけています。



都市観光の空間構造から
インバウンドに迫る
杜 国慶 教授

「地理情報システム（GIS）」と呼ばれるコンピュータ技術にもとづく分析手法を用いて、都市観光に関する地理学的研究を進めています。世界の大都市を事例に、都市観光における空間構造の把握を試みっていますが、そのスケールは国家間、国家内、都市間、都市内と多岐に渡ります。こうした取り組みは、近年日本で注目されているインバウンドを分析する研究に貢献できるのではないのでしょうか。

担当するゼミでは、地理学の知見やGISを観光学に応用しています。専門的な論文を講読するだけでなく、フィールドワークを重視し、日本国内と海外でゼミ合宿を行うことにより、実際の観光地で多くのことを学びます。ゼミでは、ひとりひとり異なる個性に合わせた指導を心がけ、学生全体がレベルアップできるような環境を整えています。

交流文化学科

Department of
Culture and Tourism Studies



交流文化学科 | Department of
Culture and Tourism Studies



観光のグローバル化に伴って世界を移動するのは、観光客である人間に限りません。観光客は観光地の特産品をみやげものとして持ち帰り、多くの人びとは観光地を訪れる前にガイドブックやインターネットから情報を仕入れます。このように観光は、ヒト・モノ・情報の流通を促進させ、その規模は地球全体を覆っています。

交流文化学科は、グローバル化する観光を背景に、観光客の生活圏、観光客が訪れる観光地、観光客が移動する過程といったあらゆる場面で交差するヒト・モノ・情報のありように着目します。観光の場面でそれらが交わり続けることで、地域の文化や社会に影響がおよび、これまでにない新たな文化や社会現象が見られるからです。

交流文化学科では、国内外で実施されるフィールドワークやそこで得られるグローバルかつローカルな知見にもとづいて、観光が生み出す「交流文化」について学習していきます。

講義の特色

交流文化学科の講義は、主に「文化」と「地域」というふたつの柱から構成されています。「文化」に関しては、交流文化を文化や社会現象の視点から取り上げた科目群を展開しており、比較文化、文化混濁、文化政策、開発、宗教、消費、言説、移住、植民地、ジャーナリズム、ジェンダー、国際協力といったキーワードにもとづく講義を開講しています。

「地域」に関しては、観光地において見られる交流文化について取り上げた科目群を展開しており、国際観光、農村観光、地域社会、地域文化、文化地理、途上国、レジャー・レクリエーション、自然環境といったキーワードにもとづく講義を開講しています。

このように、交流文化学科の科目構成は、今日世界各地で勢いを増す交流文化のありようを反映したものとなっています。また、観光だけでなく、交流文化から派生するさまざまなトピックを講義で取り上げるのも、交流文化学科の特色です。

ゼミの特色

交流文化学科のゼミの多くが、国内外の観光地におけるフィールドワークを重視しています。それぞれのゼミで、文化人類学、社会学、地理学、歴史学、文学といった学問分野の視点から、観光と交流文化の関係や観光の社会的位置づけについて専門的な分析を行っています。ゼミの成果は報告書にまとめられることも多く、単に現場志向が強いだけではありません。

観光と文化の関係を多面的に理解します

北川 愛香 交流文化学科 2014年度入学
Kitagawa Aika

大学では英語を学びたかったので、英語に力を入れている学部を調べていくうちに、立教大学の観光学部にとどろきました。英語を学ぶ環境が充実しているだけでなく、英語をひとつのツールとして調査や研究、実習を行っていることに魅力を感じ、英語にとどまらない学びを得られるのではないかと考え、観光学部への進学を決意しました。

交流文化学科では、観光によってもたらされる地域社会や地域住民への影響について取り上げる講義が多く開講されています。もともと文化による価値観の違いに興味があったので、観光ビジネスについて実務的な視点から学ぶことのできる観光学科よりも、自分の関心に近い交流文化学科を志望しました。

実際に交流文化学科で学んでみると、観光が持っている交流的な側面や観光地におよぼす影響といった観点から、観光の持つダイナミズムやその社会背景をより深く理解できることに気づきました。また、国内外における観光地の事例に繰り返し触れることで、観光と文化の関係に対して多面的な視点を持つことの重要性を感じています。

現在は、豊田三佳ゼミに所属しています。ゼミ合宿では、住民による体験交流型観光地域づくりの実践現場を訪れ、他学部では得られない貴重な経験をしています。ゼミを含めた交流文化学科での学習を通じて、自分にとっての「当たり前」がほかの社会や文化では「当たり前」でないことに気づきました。グローバルな観点から観光を取り上げる交流文化学科で学ぶことで、これまでにない新しい見方ができるようになったと実感しています。

2018年度の主な担当科目〔演習（ゼミ）のテーマ〕

石橋 正孝 准教授 Ishibashi Masataka	紀行文学論／文学／言語と社会／言説分析／演習 〔観光と文学の接点から、近現代社会の特質を考察する〕
大橋 健一 教授 Ohashi Kenichi	観光と文化／交流文化論／演習 〔「文化」概念の現代的理解と観光研究への応用〕
越智 郁乃 助教 Ochi Ikuno	アジア太平洋観光論／観光の社会的広がり／演習 〔周縁・国境域の生活世界と観光の変遷について考える〕
門田 岳久 准教授 Kadota Takehisa	観光と宗教／交流文化研究（文化人類学）／演習 〔フィールドワーク／エスノグラフィー入門〕
葛野 浩昭 教授 Kuzuno Hiroaki	観光人類学／エスニックツーリズム論／演習 〔文化発信の現場学：大使館やテレビ局へのインタビュー〕
佐藤 大祐 教授 Sato Daisuke	交流文化研究（地理学）／演習 〔企業とコラボした訪日客向け観光資源の掘り起こし〕
千住 一 准教授 Senju Hajime	観光史／植民地と観光／演習 〔歴史学の視点から近現代観光の特徴を知る〕
高岡 文章 准教授 Takaoka Fumiaki	観光社会学／交流文化研究（社会学）／演習 〔観光・メディア・都市の社会学〕
鄭 玉姬 助教 Jung Okhee	国際観光と地域交流／外国地誌（東アジア） ※ 2019年3月退職予定
豊田 三佳 教授 Toyota Mika	観光とジェンダー／演習 〔地域住民との交流から学ぶCommunity Based Tourism〕
豊田 由貴夫 教授 Toyoda Yukio	観光人類学／開発と文化
舩谷 鋭 教授 Masutani Satoshi	交流文学論／交流文化研究（文学）／演習 〔文学散歩で読むトラベルライティング〕
松村 公明 教授 Matsumura Koumei	観光地理学／外国地誌（ヨーロッパ）／演習 〔都市の暮らしと観光の関わりを地理学の眼で見渡す〕



先住民族／少数民族と
観光との関わりを考える
葛野 浩昭 教授

北欧の北極圏地域は、自然環境と先住民族サーミ人のトナカイ飼育文化が世界遺産に登録され、オーロラの地、サンタクロースの故郷、『アナ雪』の舞台として人気の観光地です。とはいえ、地域全体で観光が一様に推し進められているわけではなく、観光への想いや接し方は人それぞれです。観光の視線も含めて、サーミ人をめぐる表象の歴史や将来に関して人類学的研究を進めています。ゼミでは毎年、観光にも大きな影響を与えるさまざまな情報発信のプロたちへのインタビューに挑戦しています。昨年は「フィンランドの魅力を伝える人びと」というテーマで、大使館、百貨店、カフェ、出版社、旅行会社など、フィンランドのプロたちに聞き取りをお願いしました。学生はインタビューの成果を整理して大学のオープンキャンパスなどで発表し、調査や研究が単なる勉強ではなく、社会的な営みであることを自覚します。



日本近代史の観点から
現代観光をまなぐす
千住 一 准教授

江戸末期の開国からアジア太平洋戦争期までの日本において見られる、観光をめぐる歴史的展開について研究をしています。当時の日本は外交推進や外貨獲得のために外国人観光客を積極的に日本へ誘致するとともに、紋切り型な日本イメージを海外に流通させました。こうした歴史と、今日の日本で推進されているインバウンド拡大やクールジャパン戦略といった観光政策の間には、どこか共通点が見られないでしょうか？ゼミでは、このような観光と歴史の関係に着目し、日本近代史の観点から現代における観光現象の特徴を分析しています。ゼミでは文献講読のほか、学生たちがテーマを設定してグループ調査を行い、報告書を作成します。学生にはこうした活動をとおして、歴史的な連続性を意識しながら、観光だけでなく社会全体を見渡せるようになってほしいと考えています。



現地調査で
コミュニケーション能力を育む
豊田 三佳 教授

タイ、マレーシア、フィリピンといった東南アジア諸国をフィールドに、高齢化社会における観光について研究しています。日本人を含めた外国人高齢者が、医療やケアを求めてこれらの国に長期滞在し、東南アジア諸国では国家政策として医療ツーリズムや外国人高齢者のロングステイを誘致しています。医療や介護の担い手と受け手が国境を越えて移動する現代社会において、医療や福祉はトランスナショナルな視点から捉え直す必要があるでしょう。ゼミでは、地域住民が参画して「持続可能な」観光を推進するCommunity Based Tourismを調査対象にしています。国内と海外で行う現地調査をとおして、日本の状況を相対化する考察力や、地域の人びととの交流から学び、インタビューすることができるコミュニケーション能力を育てています。



私たちはなぜ／どのように
旅をするのか
高岡 文章 准教授

観光を社会学の観点から捉える観光社会学を専攻しています。観光にはその時代や社会の特徴が反映されていますが、観光をとおして私たちの価値観や社会構造について分析することが研究の狙いです。天守閣を始めとする歴史的建造物や歴史的町並みに関心があり、それらとオーセンティシティ（本物らしさ）の関係性に着目しています。ゼミでは、主に観光客や観光客が属する社会に焦点を絞り、私たちはなぜ／どのように旅をするのかという問いについて、メディア、消費、場所、移動などといった視点から考察しています。学生には、点数化できる知識や明日使えるスキルではなく、概念や理論といった一見すると役に立ちそうにないことに慣れ親しんでほしいと思っています。これら「思考の翼」を持って初めて、思考は自由に羽ばたくことができるからです。

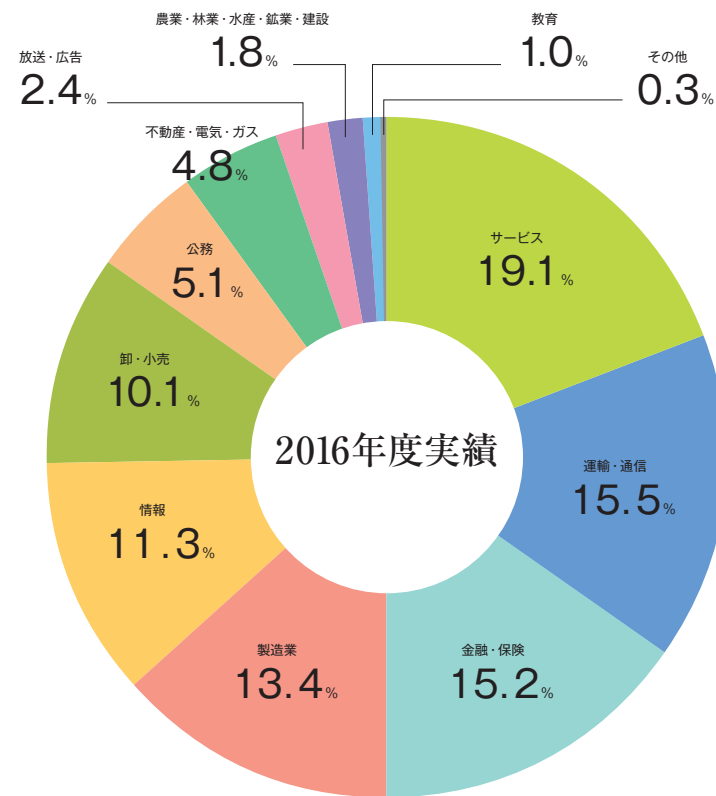
就職

Employment

観光学を学ぶ学生に対する一般的なイメージとして、「卒業後は観光関連産業に就職する傾向が強い」「就職先としてメーカーや金融機関にあまり関心を向けない」といったものがあります。しかしながら以下に示したデータからも分かる通り、こういったイメージは実際の就職実績から大きくかけ離れています。

つまり観光学部卒業生は、観光関連産業はもちろんのこと、それ以外のさまざまな業界や企業に就職しています。さらには、近年における観光現象の拡大に伴い、これまで観光とは関係が薄いと考えられてきた多くの企業が観光分野への進出を果たしてきており、観光学を学んだ人材の社会的ニーズは増加しつつあります。

もちろん、観光学部には観光関連産業への就職を目指して、毎年多くの学生が入学してきます。観光学部はこうした仲間と出会う機会に恵まれているだけでなく、互いに励まし合ったり、切磋琢磨したりする雰囲気になっています。



主な就職先

【サービス】JALエアービシー／アサヒビールコミュニケーションズ／プロダクション人力舎／ホテルオークラエンタープライズ／JA三井リース／三菱UFJリース／成田国際空港／中日本高速道路／日本郵便／富士ゼロックスサービスクリエイティブ／セルリアンタワー東急ホテル／ニューオータニ／パレスホテル／プリンスホテル／ペニンシュラ東京／星野リゾート・マネジメント／帝国ホテル／東京ドームホテル／東武ホテルマネジメント／クラブツーリズム／リゾートトラスト／近畿日本ツーリスト／三井不動産商業マネジメント／藤田観光／東京都道路整備保全公社／鉄道建設・運輸施設整備支援機構／日本年金機構／白山商工会議所

【運輸・通信】JTBグローバルマーケティング&トラベル／JTBコーポレートセールス／JTBメディアリテリング／JTBワールドバケーションズ／JTB関東／JTB国内旅行企画／JTB首都圏／エイチ・アイ・エス／ジェイアール東海ツアーズ／ジェイティービービジネストラベルソリューションズ／ジャルセールス／近鉄エクスプレス／阪急阪神エクスプレス／日本旅行／ANAエアポートサービス／ANAセールス／KDDI／ヤマトホールディングス／京王観光／三菱倉庫／西日本鉄道／西濃運輸／全日本空輸／相模鉄道／東日本旅客鉄道／東武トップツアーズ／日本航空／日本通運／富士急行

【金融・保険】三井住友海上火災保険／日本政策金融公庫／みずほフィナンシャルグループ／りそなグループ／群馬銀行／三菱東京UFJ銀行／四国銀行／七十七銀行／常陽銀行／新銀行東京／東日本銀行／八千代銀行／琉球銀行／オリックス銀行／三井住友信託銀行／三菱UFJモルガン・スタンレー証券／オリエントコーポレーション／三井住友トラストクラブ／三菱UFJニコス／川口信用金庫／大東京信用組合／あいおいニッセイ同和損害保険／オリックス生命保険／三井住友海上あいおい生命保険／損害保険ジャパン日本興亜／第一生命保険／朝日火災海上保険／富国生命保険／明治安田生命保険

【製造業】ディーエイチシー／資生堂／サッポロビール／ヤマサ醤油／敷島製パン／マイナビ／旭化成アドバンス／日立金属／パナソニック／沖電気工業／三菱電機／日本航空電子工業／日本電気／富士通／日産自動車／日野自動車／本田技研工業

【情報】エヌ・ティ・ティ・データ／日立システムズ／富士通北陸システムズ／NECソリューションイノベータ／NTTコム ソリューションズ／NTTデータソフィア／エヌ・ティ・ティ・コムウェア／伊藤忠テクノソリューションズ／楽天

【卸・小売】イッセイミヤケ／日立ハイテクノロジー／良品計画／ミサワホーム／三菱商事パッケージング／三菱食品／日鉄住金物産／LVJグループ／スターバックスコーヒージャパン／イトーヨーカ堂／そごう・西武／ローソン／丸井グループ／小田急百貨店／イオンリテール

【公務】横浜市役所／警視庁／国家公務員一般職／山梨県庁／松本市役所／大田原市役所／東京都庁／東京都特別区／柏市役所／八王子市役所／福島県警察本部／北海道庁／北山村役場／労働基準監督官／檜原村役場

【不動産・電気・ガス】東京瓦斯／東急コミュニケーションズ／ジェイアール東海静岡開発／三井不動産リアルティ／三菱UFJ不動産販売／住商アーバン開発／住友不動産販売／東急フASHリテイサービス

【放送・広告】JTBパブリッシング／テレビ西日本／東急エージェンシー

【農業・林業・水産・鉱業・建設】LIXIL／竹中工務店／東京セキスイハイム／ニチレイフレッシュ

キャリアサポート

Career Support

3年次の終わりが近づくと、卒業後の進路が気になり始めます。立教大学では、キャリアセンターを中心とした就職支援体制が充実しているほか、観光学部でも独自のサポートプログラムを展開しています。

立教大学における観光教育の歴史は決して浅いものではありません。観光学部は、長年に渡って培われた伝統を背景に、観光関連産業で活躍する多くの卒業生から協力を得て、現役学生に特徴あるキャリアサポートを提供しています。

立教大学による支援体制

立教大学では、キャリアを「仕事・職業を含めた、自立した個人としての自分らしい人生のあり方」と捉え、学生によるキャリア形成を積極的に支援しています。その中心を担うキャリアセンターは、例えば、人生や将来、大学生活や自分自身について考えることを目的としたプログラムを、1・2年次という早い段階から提供しています。

また、キャリアセンターは、「就職ガイダンス」「ステツブアップ講座」「個人相談」という3つの支援プログラムを展開することで、就職活動の進み具合に合わせたきめ細かな対応を行っています。もちろん、進路や就職に関する悩みは、学年を問わずいつでも相談することができます。

観光学部独自の支援体制

観光学部では、キャリアサポーターという専任の職員を配置し、観光学部生のニーズに合わせたさまざまなサポー

観光学部の伝統にもとづくサポート体制

トプログラムを実施しています。例えば、観光関連産業で働く卒業生による「ホテル業界キャリアセミナー」や「航空業界キャリアセミナー」などを開催しています。これらのプログラムには、学年を問わず多くの学生が参加し、観光学部での学びをこれからのキャリアでどのようにいかしていくかについて考える、よい機会となっています。また、観光関連産業以外の社会人と接する機会も多く提供しており、将来的に観光と関わる仕事を希望している学生に対しても、そうでない学生に対しても、手厚いサポートを行っています。

立教観光クラブ

立教観光クラブは、観光関連産業に従事する立教大学卒業生相互の親睦を図り、同産業の発展に寄与することを目的とした団体です。立教観光クラブは、観光学部で寄付講座「観光ビジネス概論」を開講しているほか、観光関連産業約30社が参加する「立教観光クラブキャリアデザインセミナー」を毎年観光学部と共催し、航空、鉄道、旅行会社、ホテル、旅行情報ビジネスといった産業に関心のある立教大学生と情報交換を行っています。

観光学部の資格取得支援

教員免許（中学校・社会）／教員免許（高等学校・地理歴史）／学芸員／司書／社会教育主事／社会調査士／旅行業務取扱管理者 ほか

大学院

Graduate School of Tourism

日本初の観光学研究科で観光学を究める

立教大学大学院観光学研究科は、日本で初めて観光学を専門に研究する大学院として、1998年に設置されました。以降、今日に至るまで国籍を問わず多くの観光学者を輩出し、観光学の進展にグローバルな観点から大きく貢献しています。

観光学研究科は、2年間の前期課程と3年間の後期課程によって構成されています。前期課程では、科目履修と修士論文執筆を通じて観光学に関する高度な知見を身につけ、後期課程では、博士論文の執筆を通じて観光学に関するより高度な専門性を身につけます。

前期課程の修了生には「修士（観光学）」が授与され、多くの修了生が観光関連産業を始め社会でひろく活躍しています。後期課程の修了生には「博士（観光学）」が授与され、多くの修了生が大学教員として国内外で研究や教育に従事しています。

近年の主な修士論文タイトル

- ・「日常化」する営み
 - ― 五島列島・奈留島における観光と教会の「開かれ」―
- ・戦間期における軍港都市・横須賀の観光
- ・災害ボランティアツーリズムにおけるニーズへの応答
 - ― 益城町総合体育館を事例として ―
- ・ヒトとシカの民族誌
 - ― 奈良公園における「関係性」の考察 ―

近年の主な博士論文タイトル

- ・中国廈門市・鼓浪嶼における観光地化に関する研究
- ・中国雲南省元陽におけるバックパッカー向け宿泊施設の変化
- ・大都市近郊における農村観光の発展とルーラリティの関係
 - ― 上海市崇明区前衛村を事例として ―